

小学図書館ニュース



★定期刊行物は終わる期間を予定しない刊行物です。年度が替わりましても、購読中止のお申し出がない場合、引き続きご送付申し上げます。
★著作権法により、本紙の無断複写・転載は禁じられています。

平成27年9月18日発行 第1048号付録

©少年写真新聞社 2015

枯野をひとりゆく芭蕉

山梨大学・山梨県立大学名誉教授 伊藤 洋

元禄七年（一六九四年）十月十二日、朝の震えるような寒さも、日脚が病間の障子に映る頃になると小春日和の暖かさに変わってきました。ここは大坂御堂ノ前花屋仁右衛門の貸座敷。先ほどまで荒い寢息を立てていた病人も穏やかになって、室内の緊張も緩んできました。

朝のうち天井にとまっていた蠅たちも活発に動き始めました。「翁倒れる」の報に取るものもとりあえず駆けつけ、数日来寝ずの看病に当たってきた門人たちにもほっとした気分が漂ってきました。うるさい蠅を捕えようと一人が追うと、別の者も箸に鳥もちを塗って追う。だが室内の暖気に元気になった蠅は容易には捕まらない。

その時、今の今まで眠っていた病人が笑いながらただ一言「蠅の追い方にも性格が表れるね」、人々ははっとして追う手を停めました。これが芭蕉が発した最後の言葉でした。その日申の刻、彼は還らぬ人となりました。

亡骸は直ちに棺に入れられ、薦を被せて偽装した上で淀川を伏見へ。そこから陸路で膳所木曾塚の無名庵（現義仲寺）に着いた時には日はすでに明日になっていました。同行者

は其角・去来・乙州・丈草・支考・維然・正秀・木節・吞舟ら。江戸蕉門の一番弟子宝井其角がここにいたことは奇跡でした。

師の身柄は、翌十四日、直愚上人を導師として庵前に埋葬されました。「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」、俳聖松尾芭蕉五十一年の生涯でした。「芭蕉死す」の報は蕉門のネットワークを通じて西へ東へ伝えられました。十月十八日には、其角の句「なきがらを笠に隠すや枯尾花」を発句として「芭蕉翁追善供養百韻俳諧」が催されました。前記に加えて曲水・許六・李由・卓袋・智月・土芳ら四十三人の門人が参加しました。

一見盛大に見える追善俳筵ですが、全蕉門の数からすれば驚くほど少数です。交通や情報伝達の容易でない時代とはいえ、ここに名を連ねて当然と思われる多くの門人が不在です。

正保元年（一六四四年）、伊賀上野に生まれた芭蕉は、藤堂新七郎家の用人として雇われ、俳諧マニアの嫡男主計良忠（俳号蟬吟）に随従して、主人の導きで貞門俳諧の真髓を学びました。その主人の死という不幸に遭遇したものの、そのキャリアによって得た北村季吟の免許「埋木」を得て、二十九歳という年嵩な

から江戸俳壇に進出しました。

そして、「流行」の先端を行く談林俳諧に参加して一躍有名を獲得するものの、その軽佻浮薄さに飽き足らず、俳諧宗匠としては致命的な深川隠遁を決断して自らの境地を追求しました。

ようやく「蕉風俳諧」を探り当てたのは天和が貞亨と年号を替えた頃のことです。「奥の細道」旅中の「閑さや岩にしみ入蟬の声」はその到達点であり、この旅を通じて発見したのが「不易流行」でありました。

旅が終わっても芭蕉の俳諧革新は止まりません。「不易」は不変の価値、今に生きるのが「流行」です。その流行の先が「軽み」でした。

ここまで来るともはや、貞門派時代や談林派時代の門弟は言うに及ばず、蕉風俳諧以降の子弟ですら師の姿を追うことは難しくなってきました。ましてや「軽み」においておやです。

「この道を行く人なしに秋の暮」、死の直前芭蕉が吐いた独白です。白く乾いた秋の夕映えの道、芭蕉の前にも後にも、もう誰も居ない。芭蕉が再び人々の前に「復活」するのは明治に入って正岡子規まで待たねばなりませんでした。